1993年FIP京都シンポジウムを顧みて

池　田　尚　治*

かねてから準備をしていた待望のFIP 1993年国際シンポジウムが我が国の古都京都で盛大に開催された。我が国のPC界にとって初めての国際シンポジウムであったが，会員諸氏の御支援と関係者各位の絶大なる御努力で無事大きな成果をあげることができた。心よりお慶びを申し上げるとともに深甚の謝意を表する次第である。

思えば，このFIPシンポジウムの日本での開催は，我が国のPC界の大御所の猪股俊司博士が御存命で国際的に御活躍されていた頃に日本での開催を誘致されたことに始まる。当時猪股博士はFIPの日本代表兼副会長しとてFIPの理事会に出席され，FIPの4年ごとに開かれる大会(Congress)を日本で開催するよう誘致されたのであったが，米国代表の巧みな誘致作戦によって1994年の第12回FIP大会は米国のワシントンDCに決定してしまったのである。そこで大会の日本での開催は後に譲るとして，1993年に日本でFIPシンポジウムを開催することを提案されたのである。

日本での開催が決定されると，次は日本のどこで何月何日に開催するかが検討された。これについては，当時関西新空港が1993年6月に開港する予定で工事が開始されていたことから，外国人参加者の便を考え，また，国立の国際会議場を持つ国際的な観光都市で日本の伝統文化を今に残す古都である京都での開催が当協会の理事会において決定された。次に開催の時期であるが，我が国は夏から秋にかけては台風シーズンであることを考慮し，これを避けて10月中旬以降とした。これについてはFIPの理事会で，欧米の大学の教官は10月中旬は多忙な時期となるので9月中旬にして欲しいとの声もあったが，日本の気象について説明して納得してもらった。筆者は1988年頃から猪股博士に代わってFIP日本代表兼副会長としてFIPの理事会に出席していたが，理事会で日本における1993年のシンポジウムについてのいろいろな注文や意見が出ると会議後に何人かのメンバーが個人的に筆者のところに来て，日本でのシンポジウムは日本の好きなようにやるのがよいと助言してくれた。

FIPの理事会は年2回開催される。そのうちの1回はその年のFIPのシンポジウムの際に行われ，他の1回はヨーロッパの適当な都市で開かれる。筆者が猪股博士からFIPの理事の立場を引き継いだときにFIPに詳しい日本の関係者の方から，「京都でのFIPシンポジウムの開催が決まったのだからFIPの理事会には毎回出席する必要がある」と助言されたため，それ以降は可能な限り理事会に出席することとした。1990年のドイツのハンブルクでのFIPコングレス以降では，1991年4月にノルウェーのスタバンガー，1991年9月に中国の北京，1992年6月にハンガリーのブダペスト，1992年9月に米国のワシントンDC，1993年3月にフィンランドのヘルシンキ，といった所でFIPの理事会が開催さ

* Shoji IKEDA：FIP国内実行委員会副委員長，本協会会長，横浜国立大学教授

れ，1993年の京都でのシンポジウムの準備状況の報告と討議を行ってきた。これらの会議に出席して筆者は欧州流の国際会議ではScientific Committeeの役割が重要であることを知った。また，理事会にはほとんどの国から常に同じ人が出席するのですっかり顔馴じみとなり，好都合であった。

一方，国内ではできるだけ多くの参加者を得ること，および日本でのPC技術の成果を京都シンポジウムで多数発表できるようにするために国内でのシンポジウムを実施することとした。すなわち，それまで毎年1回行ってきた当協会の研究発表会を発展させて「PCの発展に関するシンポジウム」を実施することとしたのである。まず第1回は我が国のPC技術発祥の地である石川県で実施することとし，会場を金沢市に設定して1990年10月に参加者約250名を得て開催された。第2回の国内シンポジウムは翌年11月に京都にほど近く京都よりも歴史の古い奈良で実施された。奈良を選んだ理由のひとつは京都と奈良の違いを知り，来るべきFIPシンポジウムの際の心構えをつくることにあった。第3回シンポジウムは1992年11月に福岡で実施され，ほぼ300名の参加者を得て来るべき翌年の国際シンポジウムへの盛上りを見せてきた。これら3回にわたって実施された国内シンポジウムの論文発表は，今回の京都での国際シンポジウムへの応募論文の基本になったものと思われる。なお，これらの国内シンポジウムへの参加者がほぼ300名程度に達したことから，今回の京都での国際シンポジウムには，その倍の600名程度が国内から参加するものと予測しFIPの理事会でその旨を話していたので，実際の参加者の数がほとんど同じ結果となりほっとしたのであった。また，FIPのハンブルク大会の時以前より，当協会が窓口となってFIPの各地での国際会議に参加するツアーを実施し，日本のPC技術者が国際会議に関する認識を深めるとともに諸外国の技術者との友好を深めてきた。これらのツアーへの参加者による京都シンポジウムへの御支援はシンポジウムの成功に大きな効果があったものと思われる。

我が国での初めてのFIPシンポジウムは，我が国のPC界にとって著名な世界のPC技術者の来日の絶好の機会であるので，この折角の機会を利用して京都でのシンポジウムの直前にPCに関する外国人講師によるセミナーを東京で実施することを企画した。この企画の可能性について，FIPの幹部であるフランスのVirlogeux博士にまず相談したところ，喜んで協力するとの約束を得た。そこでFIPの幹部会のメンバーを中心に講演の依頼をしたところ，会長のMoksnes氏，前会長のWalther教授，デンマークのHenriksen博士，それとVirlogeux博士から承諾の返事を得たので，加えてスイスのMiehlbradt講師およびハンガリーのTassi教授を含めて6名からなる講演者によってプレFIP京都シンポジウムの行事として「東京PCセミナー」を10月14日に開催することとしたのである。幸いこのセミナーは大変好評で230名以上の参加者が熱心に世界の最新のPCの情報を聴講した。なお，この機会を利用してMoksnes FIP会長は建設省の藤井治芳技監を表敬訪問し，京都でのFIPシンポジウムでの藤井技監の歓迎挨拶の前に友好を深めることができた（写真−1）。また，このセミナーの6名の講師を囲んでPC建設

写真−1　建設省技監室にて
（左からMoksnes会長，藤井技監，池田，および武藤PC建協専務理事）

業協会の三野定会長主催の夕食会をセミナー前日に東京で行って歓迎の意が表された。

FIP シンポジウムに先立って，京都では FIP の理事会が 10 月 16 日（土）に開催された。理事会での主要議題は CEB との統合の問題であった。理事会への出席は我が国が欧米から遠く離れているにもかかわらず，通常の場合と同じく 30 名程度であった。理事会終了後は PC建設業協会招待の日本食の夕食会が実施され，日本料理が堪能された。翌 17 日（日）には理事会メンバーとその同伴者は南禅寺，琵琶湖疎水記念館および醍醐三宝院を訪れ，秋の京都を満喫した。疎水記念館では英国の David Lee 氏（FIP 会長代理）と John Dougill 博士（FIP 事務局長）が疎水工事の責任者である田辺朔郎博士の英国土木学会誌掲載の論文や受賞の展示を見つけて感激していた。南禅寺境内にある疎水のアーチ橋も皆の関心を集めていた（**写真−2**）。静かな古都京都での日曜日の休日ツアーは，参加した FIP の理事会メンバーとその同伴者にとって日本的な雰囲気と文化とを体感し身心の気力を大いに充実させたようであった（**写真−3**）。

写真−2　南禅寺の疎水アーチ橋の前にて
（左から Miehlbradt 夫人，Moksnes 会長，Quan 夫妻，Alimchandani 氏，Park 教授，池田菊江，Dougill 夫人，Tassi 教授）

写真−3　三宝院にて
（左から Oud 夫妻，Lacroix 教授，Walther 教授，Miehlbradt 家族）

17 日の夕刻からはいよいよ FIP 京都シンポジウムへの登録と歓迎のレセプションが京都国際会議会館で始まることとなった。実行委員長の六車教授の御指示のもとで筆者がまず PC 技術協会会長として次のような挨拶を行った。

"Dear distinguished participants of this FIP Kyoto Symposium. Ladies and gentlemen. On behalf of the organizing committee of this symposium, I would like to express our sincere appreciation for your participation to the Symposium.

First of all, this is really the first international Symposium on prestressed concrete to be held in Japan. We are pleased to inform you that more than one hundred and fifty participants and their accompanying persons are coming to this Symposium from abroad. Thank you very much for coming to this traditional Oriental city in Japan.

Now, I would like to say one thing. Our official Language is English. But, I would like to ask you to use international English. International English is broken English. So, let's exchange our idea, culture and technology through this international English.

Thank you for your kind attention and I would like to invite Mr. Jan Moksnes, President of FIP, to give us an address."

そして，Moksnes 会長の挨拶の後に，PC 建設業協会の三野会長の乾杯の音頭でなごやかでかつ活気に満ちた歓迎パーティが始まったのである。

翌 18 日は朝から開会式であり，国際会館の VIP ルームに FIP の Moksnes 会長，Lee 会長代理，Dougill 事務局長，会長経験者の Prof. Walther, Dr. Wittfoht, Prof. Lacroix, Pfof. Gerwick, 日本側から藤井治芳建設省技監，特別講演者の山下宣博当協会理事および組織委員長の君島博次教授が勢揃いした。藤井技監と Moksnes 会長とはすでに顔馴じみであり，また山下理事と Walther 教授とも顔馴じみであり，君島教授は FIP の理事会の夕食会や休日ツアーにも参加されていたので和気あいあいの雰囲気であった。

19 日の夕刻は主催者による登録者全員招待のバンケットが宝ケ池プリンスホテルにて催された。全登録者に招待状を渡したもののはたして何人参加するかは全く予測が困難であった。そこで，多少の欠席者を想定して一卓 10 人のテーブルを 65 卓用意することとした。まさに 650 名が一堂に会する大宴会である。実際に参加した人数は 590 名であったので，どのテーブルもほぼ満席の状態であった。

バンケットは次のような筆者の開会の辞で始まった。

"Good Evening, dear FIP friends! Thank you for accepting our invitation to this banquet. More than six hundred are attending this grand banquet.

In the Opening Ceremony of yesterday, we had a guest of honor, Mr. Haruho Fujii, Vice-Minister of the Ministry of Construction. He is very important person, in other words, VIP. Now, just like VIP, we are FIP. In this sense, we are the First class Important Persons. FIP is just similar to VIP.

As you know FIP is the abbreviation of Fédération Internationale de la Précontrainte. But my pronunciation is not perfect. So, I would like to ask a French Important Person, this is also FIP, to pronounce properly. Dr. Michel Virlogeux, please come on to the stage. Thank you very much Michel.

I would like to propose you another meaning of FIP, that is, F is Forever, I is International, P is Prestessed concrete.

I feel confident that Foever International Prestressed concrete is dealt with First class Important Persons like you. Thank you.

Now, I would like to invite our President, the First class International President, Mr. Jan Moksnes for the toast."

バンケットはたいへん楽しい集いとなり，フランス料理と舞子さんのダンスを楽しみ満ち足りた気分を残してお開きとなった。お開きのすぐ後に宴会場の入口に置いてあったピアノに向かって前 FIP 会長の Wather 教授がパイプをくわえながらショパンの曲を即興でひき皆を驚かせたのも楽しい思い出である。

会議の日程を無事こなし，20 日の夕刻には閉会式を迎えることとなった。閉会式は六車実行委員長

の挨拶と進行にはじまり，筆者の閉会の辞と次年のワシントン DC での大会の開催と次々年のオーストラリアのブリスベンでのシンポジウムの開催に関する参加招待のスピーチがあった。筆者は閉会の辞として次のことを述べた。

"Ladies and gentlemen.

On behalf of the organizing committee of this FIP Kyoto Symposium, I would like to express our sincere gratitude for your participation to this Symposium.

More than seven hundred participants attended this Symposium to discuss Modern Prestressing Techniques and Their Applications.

I believe that this Symposium has been very successful due to all your great efforts and that this success will become one of the mile stones in the record of the FIP Symposia and Congresses.

We heartily hope that the results obtained in this Symposium will become the basis of the future development of prestressed concrete technology for the construction of durable and esthetic concrete structures. We are very happy if you build on the results of this Symposium in your devotion and contributioin to your society.

I am very happy that we now have good weather to enjoy the life in Kyoto. We heartily hope for the continuation of this mild weather for the post Symposium tours.

As you know Kyoto has four seasons. We are now in the middle of autumn and the next month, November, is more beautiful than now, I believe.

Therefore, it is your privilege to change your plans and extend your stay until November.

Thank you again and Bon Voyage, Aufwiedersehen, 再見."

閉会式終了後は，六車実行委員長を囲んでこのシンポジウムの事務局となった実行委員および協力スタッフとともにささやかな祝宴をもった。

ポストシンポジウムツアーには予想を大幅に超えた外国人の申込があり，特に明石海峡大橋の現場視察を含んだ 3 日ツアーには FIP の幹部も多く参加した。筆者は会議終了後にいったん東京に戻り，大学での講義などを済ませてから明石海峡大橋の現場でツアー参加者を出迎えた。幸い好天に恵まれ参加者は皆満足そうであり何よりであった（写真−4）。

成田空港経由で帰国する Walther 教授とスペインの Corres 教授を 24 日の日曜日の早朝成田空港まで筆者の車で送ることができ，「東京 PC セミナー」に始まった今回の FIP 関係の行事についての筆者の役目は何とか果たせたようであった。

写真−4　明石海峡大橋のアンカレジにて
（タワーをバックに Walther 教授（左）と Virlogeux 博士）

シンポジウム登録者に記念品として配付したアモルファスダイヤモンドのネクタイピンは，3年ほど前から同種の品を筆者が使い，その品質を確認したものである。また，配付の論文集入れ用のバッグも会議後に十分愛用していただけるよう高品質のものとした。いずれもそれぞれ800個の注文をしたわけである。なお，女性の登録者にはネクタイピンに代えて同じ装飾のペンダントとした。登録が済むとFIPのMoksnes会長をはじめ多くの参加者が早速にこのネクタイピンを着用していた。また，バッグもなかなか好評のようであり，外国人参加者の中にはバッグは同伴者の夫人のお気に入りとなった人もいたようであった。

今回のシンポジウムの開催に際してはロシアやエストニア等からの参加者の日本外務省のビザ取得について当協会の事務局は大変な手間を要することとなった。筒井事務局長の御努力に心から謝意を表したい。また，このシンポジウムの成功は，実行委員長の六車教授をはじめとする実行委員会の方々，中でも京都大学の渡辺先生，西山先生の献身的な御努力に大きく依存している。心から御礼と敬服の意を表したい。

実行委員会では，現在，事後処理となってしまったが，このシンポジウムの座長およびコーディネーターに対しては記念の銘板を，発表者に対しては記念の講演証をお渡しすべく準備中である。

本シンポジウムの主催者の一員として，ここに，このFIP京都シンポジウムについて，あまり一般に知られていない事柄を中心に報告させていただいた。また，筆者自身の記憶の保存のためも考えて若干細いところまで記述させていただいたことをお許しいただきたい。